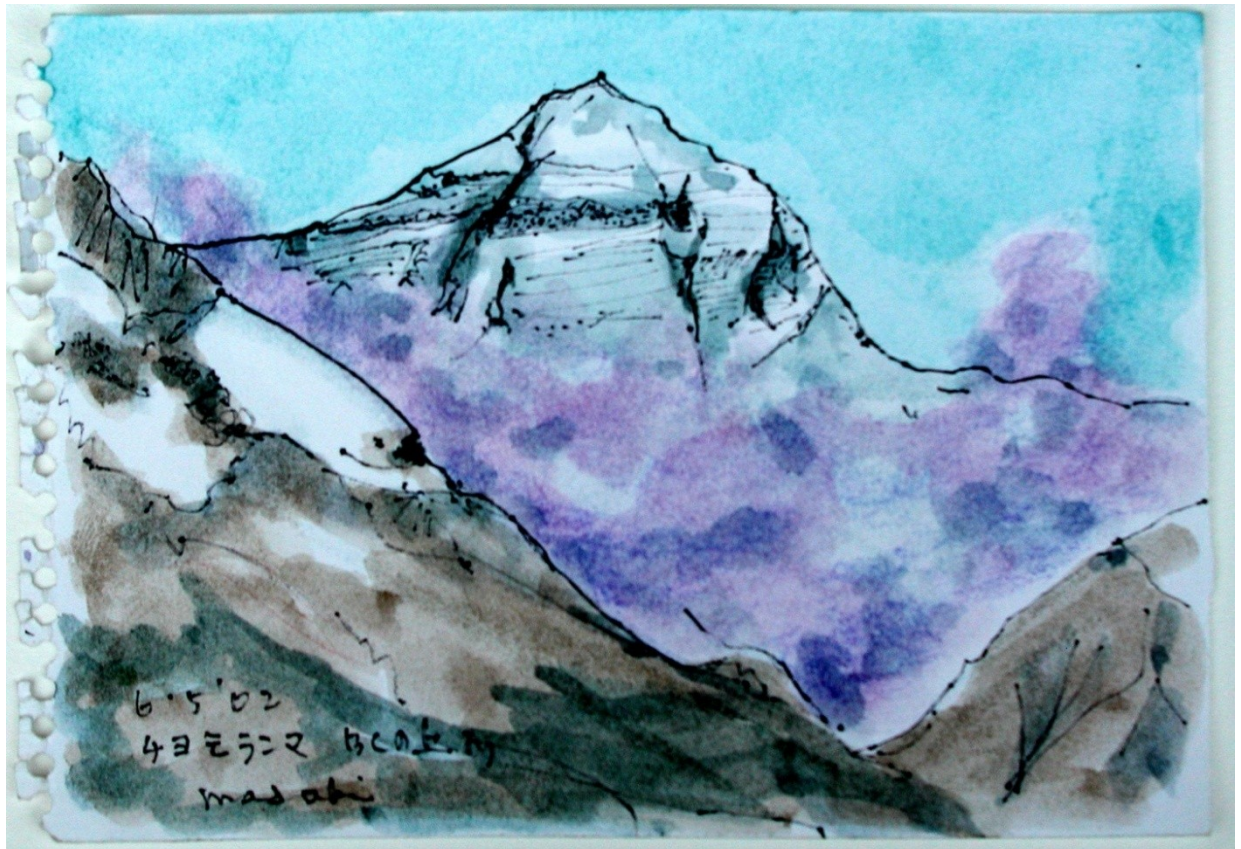


八剣山の会春秋

夏季号

平成26年6月20日

「八剣山の会春秋・編集部」発行



＜チョモランマ＞ 画 小西益樹

六甲山縦走記

2014. 5. 1 木山 裕昭

今年の3月1日～2日にかけて、日本ハイキング倶楽部の仲間と念願の六甲山縦走に行ってきました。

〈1日目〉 鵜越駅→菊水山→鍋蓋山→麻耶山

榛原を早朝出発して、近鉄・阪神・神戸電鉄を乗り継ぎ、鵜越駅に10時到着しました。ここで、鵜越駅から参加の仲間と前日に須磨から妙法寺まで歩き、今朝は妙法寺からスタートした先発隊が到着するのを待ちました。11時前に先発隊がやっと到着。市街地を歩く所もあり、思ったより時間がかかり、しかも400もある階段はきつかったとの事。皆が揃い、元気に挨拶を交わして、いよいよ神戸電鉄沿いの登山道を菊水山(458m)目指して出発です。

山頂までの標高差はきつく、しかも急な階段が続き、息があがりました。山頂は草原になっており視界はいいです。晴れていれば、大阪湾をはさんで関空が望めますが、この日はあいにく今にも雨が降りそうな天気で眺望がきかずでした。ここで昼食をとり一休みした後、鍋蓋山に向かいました。

菊水山山頂から一気に下りになり、天王吊橋に出て、ここからは登りがはじまりました。途中から霧が出てきて、鍋蓋山山頂からは視界がきかずです。登っている途中には、ボーという汽笛が遠くから聞こえ、さすが港町神戸の山だなんて感じがしました。

鍋蓋山を後にして、尾根道を通り大竜寺境内に入り、下り道を市ヶ原へ。ここは河原になっており、広々としています。ほっとしたのも、つかの間天狗道登り口へ、ここから麻耶山(702m)にむけての登りです。岩場もあり結構きついです。春雨も本降りになり、まわりは暗くなってくるし、早く山頂に着きたい思いがつのるばかりです。やっと麻耶山山頂広場に到着。うーん残念、眼下に神戸港が見えるはずが、今日は雨でなんにも見えず。広場を通り抜け、今夜泊まるオテル・ド・麻耶に着いたのが17時過ぎでした。

今日は六甲全山縦走路の核心部分の3つの山を縦走しました。登り下りが続き、全縦でも一番厳しいところです。(歩程：約6時間)



(菊水山山頂)

<2日目> 麻耶山→六甲最高点→宝塚駅

昨夜は雨のため、100万ドルの神戸の夜景は見れず。これも楽しみにしてただけに、少しがっかりでした。

今朝は曇り空、8時に麻耶山山頂のホテルを出発しました。三国池から六甲山ホテル前を通り六甲記念碑台に向かいました。縦走路にはところどころに雪が残っています。記念碑台を後に、ゴルフ場脇の雪道を悪戦苦闘しながら通り抜け、六甲最高点(931m)に向かいます。想定していたより時間がかかり12時過ぎに最高点に到着です。ホテルから4時間歩き、足も疲れてきました。ここで、昼食と休憩です。

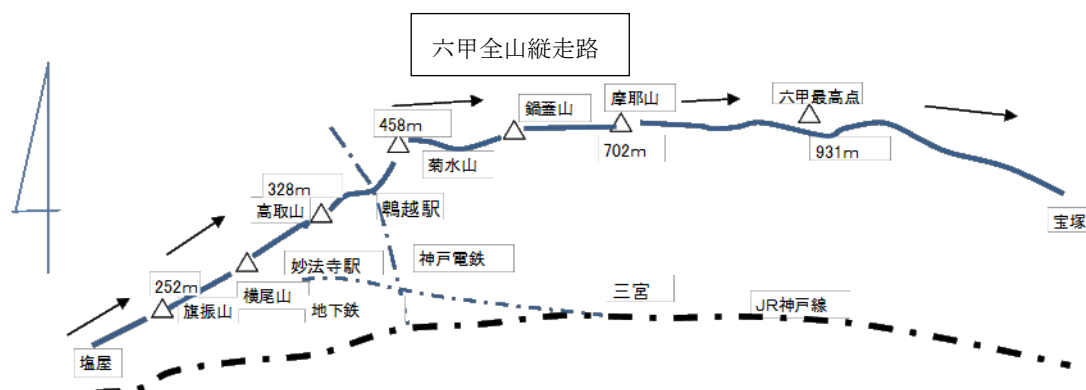
さあ、いよいよ六甲山に別れを告げ六甲縦走分岐点に向かいます。



分岐点からは、宝塚に向けて、長い長い下りの山道が続きます。(六甲最高点)途中、雪でぬかるんだ道を慎重に足を運び、船坂峠から塩尾寺へと進みます。塩尾寺から宝塚への急な下りに、膝が笑います。しばらくすると宝塚の街が見えてきて、最後の力を振り絞ってゴールの宝塚駅向かいました。駅に17時過ぎに到着、2日間にわたる40kmの縦走を無事終えることができました。

今日は1日で28kmの長距離を歩くコースです。しかも下りが延々と続き、足に相当の負担がかかります。(歩程：約9時間)

残雪の六甲縦走果たしたり 裕昭
麻耶山はその名も優し春の雨 //



六甲全山縦走パートⅠ句集

2014. 3. 28

春山路芭蕉句碑よりいざ発たん
穏やかな須磨の浦より春山路
鉢伏せへ登る初音の応援歌
霞む中明石大橋延びて消ゆ
奇岩路も瀬戸内も又春光下

須藤 凡雑

麗らかや釣り糸垂らす須磨の浦
春光に花鳥草木喜びて
手招きす孫を相手の春休み

高見 凡高

春霞播磨灘とて風ぐことも
小舟出し播磨の波にうたた寝す
源平の影絵のごとく霞む谷
馬の背に掛かれれば優し春の風
春風と馬の背渡る四剣士
玉筋魚(いかなご)は好きや播磨の海も又

原 政雄

句碑並ぶ須磨公園が登山口
見下ろして須磨も明石も霞かな
一の谷見つつ苦戦の登山かな
咲き初むる敦盛桜世は平和
菜の花の丘より沖に淡路島
古戦場沖の釣り場の長閑なり
春光や六甲山の裏おもて
山笑ふ下山果たして膝笑ふ
古戦場今は長閑な海と山
汗しとど四百段を登り終え
神戸とはおしゃれな街よ春うらら
車窓より六甲連山春霞
どこからも見えてひねもす春の海
木漏れ日に笑むは一輪紅椿
聞きなしの音には未だ春告げ鳥

金城 凡生

(完)

写真「我が家の藤の花」

2014.5.20 野田庄次

今を盛りと咲く「我が家の藤の花」を色々と構図を工夫して撮影しました。
気に入った一枚の画像ファイルを悪戦苦闘してメール添付で金城さんへ送付したところ即席の「我が家の藤の句」を作って頂きました。
時間が過ぎれば艶やかさを失う花を「写真と俳句」して表現して見ると中々良い2014年5月の記録になります。

と云う事でタイミングが合ったので会誌『春秋』に投稿させて頂きました。



大和富士見ゆるわが家に
藤の花 凡庄

(備考)

間もなく編集部より詳細案内があると思いますが、季刊の会誌「八剣山の会春秋」に加えて『写真特集号』を発行する計画をしております。

●7月31日原稿締切、8月20日発行

●内容：A. 写真＋コメント、B. 写真加工編集作品、C. 俳句埋め込み写真など
この野田さんの作品はその一例と思って頂きたいと思います。

(編集委員：須藤和雄記)

○羊歯植物「ひとつば」(一つ葉)

「ひとつば」は羊歯(シダ)植物である。

春の山菜としてお馴染みのゼンマイやワラビ、コゴミ(クサソテツ)なども同じ仲間である。また庭の袖垣の傍や少し日陰になったところにアオキやハランなどと一緒に植えられている「トクサ」。これも同じ仲間である。これらは古くから様々な民族で食料(あるいは薬草)として利用されていた。トクサを食べていたアメリカネイティブも居たという。ネパールの標高2000m近くにある山道には日本と同じワラビが沢山生えていた。

羊歯植物といっても草ばかりではない。茎の表面を気根と呼ばれる細かい根が密にからみ合って覆い、まるで木の幹ようになる。大きなものでは幹の径50cm、高さ7mにもなる木性羊歯の「ヘゴ」が知られている。幹に○の中に八の字のように見えるユウモラスな模様があるのでマルハチともよばれる。沖縄の西表島で自生するヘゴを見たことがある。洋ランや観葉植物の栽培用にヘゴ板やヘゴ棒に加工して使われるが、乱獲が心配される。

また「タニワタリ」は常緑の緑の葉とその新芽が美しいので観葉植物として都会でも良く見かける。波うった長い葉が幾重にも漏斗状に開いて重なり合っている。西表島の森の中を歩いた時、木漏れ日を浴びて浮かび上がったタニワタリは実に印象的だった。

昔から畑作の難敵、あの「スギナ・その孢子穂が土筆(ツクシ)」もトクサ科の羊歯植物である。作物の間からところ構わず芽を出し、引っ張るとプツンと根が切れて何度でも新芽を伸ばしてくる厄介者である。地下茎は40センチもの土中にあって根こそぎにするには相当忍耐がいる。わが国では(難防除雑草)に指定されている。最近では健康飲料のスギナ茶などと巷でもはやされているが、江戸時代には料理に使われていたという。

トクサでも極細で背丈が15cmくらいのものは「ヒメトクサ」と呼ばれ、我が家にも5cm位の小さな鉢植えがある。これは草の先端にツクシの様な孢子をつける。愛好家の話だと、穴の無い鉢に植えておくと機嫌がいいらしい。私は受け皿に水が溜まるようにしている。トクサの節のところにギザギザがあり、これが葉である。トクサは砥草ともよばれ、茎にケイ酸を含むことから昔はトクサの茎を煮て乾燥させたもので刃物を研いだり、漆器の木地の仕上げに使ったそうである。滝廉太郎は手の爪をこのトクサで磨いていた、おしゃれな人だったとか。

話を戻すと「ひとつば」は常緑植物である。

辞典には葉の形は長い葉柄(ようへい)のついた長楕円形、革質、表面は密な毛で覆われ匍匐茎は針金状で硬くて長いとある。この姿からも分かるように、乾燥に滅法強い、というより特に乾燥した岩の上などを好む。むしろいつも空気に触れるような、水気の滞留しない環境を好むらしいのだ。和歌山の太地の岬ではソテツの幹の周りを根元から上までびっしり覆っている見事な「ひとつば」の群落に感動したことがある。

たしか京田辺の一休寺の境内にもあったし、高知県の四万十川の河口、中村でもみたことがある。温暖なところでは住み心地がいいのだろう。関東以西に自生するとある。

気をつけてみるとこれまで色々な場所で「ひとつば」を見かけたが、ただ濃緑で色も形も

地味なゆえ目立たない。岩場に少しも動かず茂っている姿は颯爽として古武士の風がしないでもない。さらに云えば唯我独尊のようでもある。

「ひとつば」には花は咲かない、他の羊歯植物と同じで、胞子で増える。葉の裏に孢子嚢（ソーラス）と呼ばれる茶色をした斑点のようなものが出来る。何処にでもある「ノキシノブ」の葉の裏に点々と付いているのが孢子嚢の代表的な形である。それとは違い、葉の裏を返してみると一つ一つのソーラスに間隔が無くて、茶褐色の孢子嚢がびっしり着いている。同じ株でも胞子の着かない葉もあるようだ。

「ひとつば」の名の由来であるが、一つのみの葉（匍匐茎から単葉）を出すところにある。植物では葉が対生になったものが多い中で変り種としてこのような名前がついたのだろう。樹木ではヒトツバタゴ（なんじゃもんじゃの木）がある。伊那佐の民家には巨木があって毎年5月終わりが枝いっぱいに見事な白い花を咲かせる。

この冬、棚に置きっぱなしの鉢植えの「ひとつば」が春になっても古い葉を落とさず元気がなさそうなので思い切って殆どの葉を鋏で切り落としたところ、いっせいに新しい葉を垂直に伸ばして10日間経った今では緑のやわらかい葉が一斉に立ち上がり見応えが出てきた。このように生き返った植物を目にするのは 何時でも気持ちの良いものだ。

胞子の着いた古い葉も少し残しておいたが新しい葉はこの胞子の着いた葉より高く伸びないらしい。高鉢に何年もの間、植え替えせず肥料もろくにやらないのに生きている、自生地では40cmにもなるが、葉が小さいのは鉢植えによる矮生化のせいだろう。

「ひとつば」の変種で葉の形が珍しいものが愛好家に好まれているようだが、私の庭では「ひとつば」の他「イワオモダカ」「エボシヒトツバ」と「ビカクシダ」が長命を保っている。なぜならこれまで述べたごとく、ねが丈夫だからなのだ。

環境にたいして対応力の弱い山野草はなかなか栽培が難しいし、2～3年経つといつの間にか消えてゆく。自生地での土壌、乾湿、風光の強弱などが庭の鉢植えではなかなか再現出来ないからである。一方種子から育てるとその場所の環境に適応しやすいことが知られている。高山植物でもこぼれ種で育ち長年咲き続けるものなどがその例である。

「エボシヒトツバ」の性質は「ひとつば」と同じである。その特徴は葉にあって、「ひとつば」よりかなり短くて、多少厚い。形はイカの頭に似ていて、丁度イカを火で炙ったときのように一枚一枚が不規則にねじれている。これが烏帽子に似ているのだろう。

「ひとつば」は我が家の健康優良児ではあるが、地味なゆえに家人の関心があまり及ばない。羊歯植物の歴史はなんせ古い。この祖先は4億年前に出現したというから、人類誕生の歴史の100倍も昔のことである。それが今机の上に載っかっていると思うと感慨深くなるし、スギナも余りむきになって掘り返さない方がいいのかもしれないなどと思ってしまう。

「イワオモダカ」は「ひとつば」とは一寸違い水分が好きである。葉も木の若葉のように柔らかくホコリのような柔らかい毛が表面を覆っている。「ひとつば」よりもずっとデリケートな常緑の羊歯植物である。

水切れになるとヨレヨレになってみる陰も無い、しかし水をやると素直に蘇ってくれるので、じつに喜怒哀楽？がはっきりしているところがあって、こちらも相手にしやすい。初夏の今頃、盛んに新しい葉が次第に古い葉に取って代わる。

そして「ひとつば」と違いもう一つ軟弱！な点がある、それは寒さに弱いということである。5℃以下になるともうダメである。冬は室内に取り込み机の上で過ごす。

培養土は砂土(桐生砂)主体でやはり高鉢に植えると垂れ下がった葉との釣り合いがとれる。肥料も偶に置く程度。自生地はやはり熱帯のようである。

庭の鉢植にある もう一つの羊歯植物の「ビカクシダ」は外来種(台湾産?)のようだ。「ひとつば」と違って姿形がなかなか味わい深い。**外套葉あるいは栄養葉(夏葉)**と孢子葉(秋葉)があって、ハート型の薄く柔らかな外套葉は植木鉢に巻きつくように広がる。複数枚の孢子葉は青々とし厚みが有って長く垂れ下がるように伸び、葉の先が鹿の角のように裂けている。また季節によって各々の葉が交互に成長する。夏の今は孢子葉の成長が見られる。この間、外套葉は茶色くなって休眠しているかのようである。孢子葉の成長が止まり落葉する秋から冬にかけて、今度は新しい緑色の外套葉が前年の茶色の葉を覆うように広がる。これを毎年繰り返すので個体が少しずつ成長する。

名前の由来のビカクは麋角(大鹿)の意味で孢子葉の先が鹿の角のように分かれているのでビカクの名がついたらしい。孢子葉の形がコウモリを連想するところからコウモリランの別名もある。孢子葉はこの葉の裏に着くところは「ひとつば」と同じである。

自生地は世界の熱帯地方である。従って5℃以下になると室内に取り込む必要がある、おき場所はやはり半日陰がよろしい。これも常緑で自生地では木に着生しているらしいので、いつか自生地で見たいと思っている。

この他、羊歯植物で我が家の盟主のようなのがいる。

それは「シノブ」である。二つ目は常緑で「トキワシノブ」(常葉忍)。このトキワシノブはかなり昔、名張の園芸店で買ったと思うが、プラ鉢にケト土を盛り上げその上に植え付けたのが少しずつ茂って鉢を完全に覆ってしまった。これを大きな素焼きの鉢を逆さにし、その上に置いてあるがやがてこの素焼きの鉢も覆ってしまう勢いである。おき場所は半日日陰の風通しのよい棚の上である。秋になると枯れて縮れた葉は自然に落ちて入れ替わる。匍匐茎には表面を覆う太い気根があって濡れた猫の尻尾のような質感があり、色は鈍い銀色で鉢の全体を粗い網の目のように覆っている。この銀色の気根と濃緑の切れ込みの多い葉のコントラストが良い。これも乾燥に強く冬は戸外で平気である。とくに夏の水遣りのあとなど辺りに漂う清涼感がなんとも云えない。

二つ目は落葉性の「シノブ」。私の庭にあるシノブは山茶花の枝からぶら下がっている。秋になると葉を全部落として硬い匍匐茎が何重にも丸く、かたい茶褐色の鳥の巣のようになってじっと春を待っている。夏には風鈴とともに縁側を飾り、季節の風物詩である。新緑のやわらかい緑のレースのように薄い葉が美しく、水やりの後ではこれも又涼を呼ぶ。このシノブの株を大きく育てるには、落葉すると紐で括って逆さにして吊るしておくといよい。翌年春になると匍匐茎が玉を包むように上向きに伸びてくるので年々株が大きくなっていく。ちなみにシノブは忍からきたという。冬の風雪を耐え忍び春に美しい芽吹きを見せてくれる故だろうか。私はこの音感が好きである。(終り)

K2・バルトロ氷河トレッキングレポート

2014年5月20日 林田俊彦

キリマンジャロ登頂、エベレスト街道 3 大展望ピーク TK に続く今回はパキスタンにある世界第 2 の高峰 K2、8611m を見に行く。“中央アジアの屋根”カラコラム山脈には 8000m 峰が 4 座、7000m 峰なら実に 60 座以上もある白い巨塔また巨峰の世界だ。東のネパールヒマラヤと並ぶ世界的スケールの大山脈と知り、参加する、もう一つの魅力はバルトロ氷河というひびき、一度は本格的氷河の上を歩いてみたいと思ったこと。

TK の概要 2005. 7/1～7/25 の 25 日間、アルパインツアーサービス (株)

参加メンバー 男 6 人、女 4 人にツアーリーダー (バルトロカンリ 7274m 登頂者) 島方氏の 11 名、キリマンジャロ 2 名、モンブラン 2 名の登頂者、ニュージーランド、キナバル、カナダ、中国その他の登山、TK 歴数回と経験者ばかり、9 人は 60 歳以上、最高齢は 73 歳の男性、仕事持ち 4 人、名古屋、神戸、長野、奈良の小生、他は千葉、東京近郊の連中。

7/1 成田からパキスタン航空で北京経由、飛行時間約 7 時間、時差 4 時間 パキスタンの首都イスラマバードに着いたのは 23 時半、ホテルに 0 時過ぎ着。

7/2 TK の公的手続きでイスラマバードに 1 日滞在、市内観光 イスラム教のファウルサムモスク見学、ダウルネン湖、バザール (市場) では市民生活感がわかる。市場前は車の洪水、信号はなく隙間があれば車が無造作に入ってくる、その間を人が通る、単車あり、時に馬車も通る、よくぶっからないものと感心する、道路は埃っぽく汚い、道路際には露店が張り出し、エネルギーと言いか熱気がムンムン、交通機関は小型のワンボックスカーのバスに十数人が乗ってドアからはみ出している。バス停は見当たらない。

ホテルに帰り高山病対策の説明、メンバーの自己紹介、個人の自由時間はない、治安が悪いので各自での自由行動は出来ない。

7/3, 4 本来 1 時間余でスカルドへ山岳飛行便で行く予定が天候不良で飛ばず専用車 (小型バス) で 2 日かけて移動、1 日 8 時間余のバス移動、この道はカラコラムハイウェイといい、パキスタンから中国へ向かう山岳道路で一応舗装されているがガードレイルや照明もなく眼下にははるか下にインダス川を見下ろす、断崖絶壁を縫うように走るスリル満点なんてとても言えない命預けますといった心境だ。途中最初の山、ナンガパルバット 8126m を車から降りて遠望する。昼食にはバザールで買い込んだ黄色く熟したマンゴーや大きいサクランボをどっさり出してくれた、これが最高に美味かった。皆手が伸びる。特にマンゴーは日本では高級果物だが何度も食後のフルーツとして登場する。

3 日はチラスの“シャングリラインドスビュー”のロッジ泊、文字通り川幅 500m もあるインダス川が見下ろせる、白濁の激流は雄大だ。

4 日はスカルドの“K2MOTEL”泊、庭はたくさんの花が広がる芝生を敷き詰めた高級ロッジという感じ、庭の一角には K2 のイタリア遠征隊が利用する山の展示場がある、数多くの遠征隊やトレッカーが利用する美しくくつろげる宿だ。ここに TK に不要なトランクなどを置いていく。

7/5 朝から小雨、小生は昨日の夜と朝は食事抜き、猛烈な下痢で食欲0。

今日はジープ3台に乗り3~4人乗りの助手席に乗り込みTKの出発地3000mのアスコールへ向かう。道はぬかるみ途中ジープから降りて何度も皆で押したり、断崖を行く部分あり、狭い坂道を下るときは頭から突っ込みそうになったり、逆に勾配の急な坂道を登る時は着地点が見えず空を仰ぐ一瞬、片側は何十mも下には激流渦巻くインダス川が不気味に見える、途中ゴロゴロ石の沢を何度も渡ったり途中で止まったりジープの体験は忘れられないスリルより恐怖だった。

アスコーレまで3分の2ほど行った所で崖崩れにあう、大石がゴロゴロ道を覆う、ジープ3台から降りて4時間近く歩くアクシデントあり、テント場には午後7時半ころ着。周りは暗い、我々のテントや食料はまだ着いてない、夕食は9時過ぎになる、小生は体調不良と疲れて食事抜きですぐ寝る。

7/6 今日からトレッキング開始、8日間かけて目的地のコンコルディアへ向かう。

スタッフのガイドは大親分のアリー氏、お腹が出てとてもガイドに見えないが後で聞くがこのルートのガイド歴100回以上という大ベテラン、英語ぺらぺら、日本語も少ししゃべれる。サブガイド、コック1人、キッチンスタッフ6人、ポーター頭1人の計10人が最後まで我々をサポートする。あとは現地採用のポーター出発時は100人近い。常時3~40人は同行する。我々のテント7張り、テント内の部厚いマット人数分、我々のダッフルバック11人分、ガモウバック（携帯用加圧装置）、食堂の折り畳みテーブル、イス、食堂テント、料理テント、トイレテント、料理道具、燃料、食料etc・・・。

7/7, 8, 9 一日の行程は昼食をはさんで6~7時間の歩行、このコースは激流に沿って目のくらむような岩場の高まき道や崩れやすく歩きにくいモレーン上のトレイルを16日間歩き通す体力と精神力が必要な健脚向のハードコースだ。

渡渉も何度かあるがサポーターが川に入りサポートしてくれる、9日はポーターの休養日、本格的パイユのテント場には洗面用流し、トイレ、シャワーがある、シャワーはバケツに水を汲み自分でかけて流す、雪解け水なので冷たいがスッキリする。晴れなので1回目の洗濯をする。洗濯ものを外で干す時や食事中もサポーターが盗られないように我々のテントを監視する。他の隊も10数組泊まっている、現地ポーターが職を求めうろうろしているので、メンバーの一人がストックを盗まれる。ポーターの休養日には途中から連れて来た羊2頭を解体、振舞われる。我々は夕食に串焼きと肝の煮付けを食す、若い羊が供されるのでやわらかく旨い。その後いつしか宴会が始まり、イスラム教徒96%のこの国は禁酒国で酒がないが食料入れの樽をたたき手拍子で何かを発散するように延々と歌い続ける、酒がなくても羊肉のおこぼれで盛り上がるポーター達の一面を見る。メンバーの女性群も自然と体が動き出したとか。

7/10 いよいよバルトロ氷河に入るこの辺りから5~6000mの山々が見えてくる。氷河の氷の上はモレーンと言って砂利混じり砂礫に覆われているのでアイゼンやピッケルなしで歩ける、高度を増すに従い氷がむき出しの道が多くなりクレバスを渡る回数も増え油断していると滑る。幅のひろい深く切れ込んだクレバスにはアルミはしごがかかっている、ちょっと緊張する。

ここまで来ると秀峰パイユ6610m、岩の城塞ランゴタワー6545m、グレートトラ

ンゴ6286m、カテドラル6007mなどを間近に見ながら歩く、行く先々で少しづつ姿を替えていく山々を堪能する。

氷河のアップダウンの道を4日かけて最終目的地のコンコルディアに13日に到着、皆と握手攻め、中には感激して目頭を押さえる女性群や最年長の男性も涙を流し喜びにしたり、山頂の登頂と違うが13日目で4650mの目的地に全員無事で目的を達した感動の時だ。あいにく小雨交じりのガスの中でK2は見えない。残念だが予備日があるので明日に期待する。バルトロ氷河の幅は3Kmもありとてつもなく広い、クレバスを越えた数を数えたメンバーがいて70数か所、ハシゴ付は3ヶ所、渡渉地点も数か所あり長い道のりを歩いた達成感にひたる。14日もガスがかかり7～8000mの周囲の山々は全体像が見えない、1日中テントにいてはもったいない、K2のBC手前のK2の好展望地へ片道2時間かけて行く。

一瞬の晴れ間を待ちK2バックに記念写真を撮る、K2の真ん中には厚い雲の帯がかかり残念だ。途中イタリアのK2遠征隊に出会う、大きく太った牛を1頭連れて行く、食料だ。

15日は下山日だが下山途中の予備日を先取りしてもう1日コンコルディア滞在をツアーリーダーに皆お願いする、そのかいあって今日は晴れ、氷河の上のテントの真正面にK2が全貌を見せる、感動だ。

今回のトレッキングのハイライトは大自然の壮麗な“円形劇場”コンコルディア、ここには世界の17の高峰のうち6座がひしめいており世界で最も豪勢な山岳景観を誇っている。我々はねばって3日間滞在しやっと全貌を見ることができた。我々はここに立っている、最高の幸せを身体いっぱいを感じている。

山好きな人なら一度は訪れたい、地球上のトレッキングの極地というべきコースとアルパインのカatalogに記している。K2は風格が漂う、思わせぶりに3日目に全容を表す。

360度 7～8000mの巨峰群が見える。王者K2、8811m、輝く壁ガッシャブルムI～IV峰、8034m、(II峰)、広い頂ブロードピーク 8051m、霊峰 マツシャブルム7806m、花嫁の峰 チョゴリザ、黄金の玉座 バルトロカンリ 7274m、怪峰 ムスターグタワー、秀峰パイユ 6610m、鋭鋒ミーターピーク、テントそばには白と黒の岩が入り組んだマーブルピーク6256m等々。今日は昼からガッシャブルムのベースキャンプ寄りの片道2時間近くのビューポイントへ出向く。今日は文句なしの好天なので皆足取りは軽い。

すっかりガイドのアリーと仲良くなり山名をあれこれ教えてもらう。榛原町の英会話教室に通ったことが役に立つ。

下山はルンルン気分です予備日なしで5日かけて下るが今度は高度を下げるに従い気温42～3度の歩行はこたえた。同じ道を下るが行きを感じなかった特にウルドカスからの下りは高山植物が多く黄色、赤、白、紫や小ぶりのエーデルワイスなどのお花畑が連続していて女性群は撮影に忙しい。

7/22 行きに飛行機が飛ばなかったがスカルドから飛行機が飛び、イスラマバードでは丸一日観光が出来た。ラッキーだ。

次の日仏教のガンダーラ遺跡などを観光する、土蔵の仏像群が多数あるが崩壊がひどく保存状況が雑で手が回らない国の様子も見える。2ヶ月後だったか大地震が発生、我々の泊まったホテルの近くのビルが倒れていたのを新聞で見る。現地のサポーターの連中を安ずる。



K 2 (8,611m) をバックに
2005. 7. 18

K 2バックにメンバーと



コンコルディアから見るK 2 (8,611m)

2005. 7. 18

コンコルディアのテント場からK 2



バルトロ・カンリ (52)

2005. 7. 18

バルトロ氷河、左バルトロ・カンリ



カテドラル 6,067m 神戸の後藤さんと
2005. 07. 18

2005. 7. 18

カテドラル



渡渉



氷河上で山に囲まれLunchをいただく

2005. 7. 18

昼食



ガイドのアリー氏

2005. 7. 18

コック、キッチンスタッフ一同

現地スタッフと



なぜか女子学生にモテモテ パキスタンモジュール

2005. 7. 18

イスラマバード博物館で女子学生と

「この町に住んで 36 年」(その 2)

2014.5.15 金城 凡生

天満台へ引っ越してきた翌日、荷物の整理に追われていると、自治会の会長を名乗る N さんが訪ねてきた。自治会へ入会の勧めである。

近所の人が、私の入居を目ざとく見つけて、すぐに自治会長へ報告したのでしょう。自治会長も転入者を心待ちにしていたようである。

当時の「榛原ネポリス」は 2000 余の区画に一割足らずの 180 戸が入居しているだけである。売り出し中の建売住宅と宅地が広く点在している。

売り出し中の宅地の上では雲雀が賑やかに囀っている、のどかな光景である。

入居者が少ないだけにバスの便も少なく、又、榛原駅から天満台行きの最終バスは午後 7 時 40 分だった。会社の仲間と飲み屋で、一二杯飲んだだけで『最終便に間に合わないからお先に失礼』と言ったら『まだ始まったばかりじゃないか、君はどんな所に住んでいるのだ』と怪訝な顔をされたこともあった。

退社が 6 時を回ったら、最終バスには間に合わないで、駅から団地までしばしば歩いた。しかし、半年後には入居者も増えたお陰で、最終便は 9 時台になってほっとした。ところが気の緩みもあって、この呑み助は乗り越しも度々。大阪で一杯飲んで帰るとき八木駅でやっと坐れてつい、うとうとして気がついたら赤目口駅であつたり名張であつたり。

乗り越して名月仰ぐ赤目駅

乗り越して駅員優し遠蛙（とうかわず）

長距離通勤苦と言え、下（しも）のことでも苦労した。と言っても大小便のことである。出勤どき、近鉄の急行に乗って榛原から上六まで約 50 分。大和高田駅を出発したら鶴橋まではノンストップ。その間に便意を催す場合はしんどかった。途中下車が出来ないから、ただ耐え忍ぶだけ。でも耐えられない場合もある。ある時など、「大」を耐え忍んだあげく、鶴橋駅のトイレに駆け込んだものゝ先客あり、堪らず小便器に＜ちん＞ならぬ尻を向けてことを済ませた。ところがボタンを押しても流れないので持っていた新聞かぶせてその場を去った。後で掃除にきた叔母さんはびっくりしただろうな～。

でも、その後小便器に新聞を被せてあるのを見たことがあるが、あれも＜ご同輩の仕業＞だろうと同情した。

そんな通勤苦から逃れる休日は楽しい。丘陵を切り開いたこの団地の周りは大和富士と呼ばれる額井岳をはじめ宇陀の山々に囲まれ自然がいっぱい。散歩の足を一寸延ばすと田園風景である。4 月末に引っ越してきたので、山々の新緑が眩しかった。そして 5 月の連休の頃は、額井岳の麓では田植が始まっている。田水を張った棚田に山影が映っているのも私にとっては新鮮だ。沖縄では

ほとんど稲作がないから身近に見るこの光景は私には珍しかった。

大和富士映して里は田水張る 凡生

この町での暮らし一年を過ぎ、春夏秋冬を経験したら、季節の変化が素晴らしい。亜熱帯の島沖縄では四季の変化に乏しいので季節感があまりないのと対照的である。小学校・中学時代に唄った文部省唱歌の歌詞は沖縄の風景には無く、内地へ行って雪や山紅葉を見たいなあと思ったものである。

しかし、この町の周辺では、文部省唱歌の歌詞の世界であり子供にもその歌詞の説明もしてあげられる。

そして「朧月夜」「故郷」「春の小川」「紅葉」などの歌詞が実感として歌える。なかでも、歌詞もメロディも好きなのは「朧月夜」である。

朧月夜

- 1、菜の花畠に 入り日薄れ
見わたす山の端 霞ふかし
春風そよふく 空を見れば
夕月かかりて におい淡し
- 2、里わの歩影も 森の色も
田中の小路を たどる人も
蛙のなくねも かねの音も
さながら霞める 朧月夜

裏山と前に聳える山々と、四季折々の季節を目に肌を感じながらこの町での生活に慣れてくると、これを趣味に活かせる手はないかと思うようになった。そこで思い付いたのが＜俳句＞である。俳句の入門書を読むと「俳句は花鳥風月を詠むもの」とある。ならばこの地に住むものとしては、恵まれた環境ではないか。そして山がある。「俳句と山で遊ぼう」それが通勤苦と人生を癒す糧になるのではと思った。ところが俳句も、山登りもその体験が無い。

そこで手始めに俳句の入門書「歳時記」を読むことにした。

菊の香や奈良には古き仏たち	芭蕉
閑さや岩にしみ入る蟬の声	〃
山路来て何やらゆかしすみれ草	〃
春なれや名もなき山の薄霞	〃
宇陀の野に都草とはなつかしや	虚子

そこには、句作りを始める者を刺激する句が並んでいた。それをきっかけに俳句の世界に入門する気になった。

次号へつづく

スイスアルプスと登山鉄道の旅 (その4)

7/27Sat. to 8/5Mon. , 2013

2013. 8. 28 真田一郎

旅7日目だ、朝5時前に起床した。
身支度をしてカメラや携帯電話のバッテリー充電を確かめるのも日課であった、
AC アウトレットの変換器を2つ借りていてよかった。

ホテルを6時ちょっと前に出て昨夕教えてもらった撮影場所に向かった、川沿いの橋まで20分余の早足で着いた。
マッターホルンの前かがみにとんがった先端が少し赤くなり始めていた。
信じられないほどの黄金色に染まる頂きが素晴らしかった、早朝の低温と空気が乾燥しているからだろうか。

マッターホルン



旅8日目、快晴だった、好い日を過ごせそうな予感がした。
ホテルを山岳案内者と出発したのは8時半であった。
いよいよ第二目的のゴルナーグラート展望台(3130m)に向かうべく同名の登山鉄道(GGB)に乗車した。
事前に指示されたとおり、進行方向の右席を取り車窓から山岳鉄道にふさわしい景観を楽しめた。
ゴルナーグラート駅から15分ほど時間をかけて、ゆっくり慎重に呼吸を深くしながら展望所に向かった。

期待どうりの見事な大パノラマが表・裏360度に広がっていた、69才までは経験のない規模の大きな眺望だった。

カメラを構えたがあまりにもまぶしくてコンデジではファインダーが使い物にならないほどだった。
パノラマで左端は認知できたが、眩しくて右端の主役が入っているのか判断できなかった、結果は失敗だった。

先ずは、表側、 右から主役のマッターホルン、 左からモンテローザ、リスカム
そして裏側中央にはバイスホルン

その他いろいろまとめて 4000m の 29 峰がぐるーと一望できたらしかった。

案内者の説明で名前と実物を理解できたのは 6 峰だけだった、69 才達成記念旅行ではこんなものか。

表にいながらまるで逆どんぶりが変形したかのようなモンテローザ、裏に置いとくのはもったいない男前で丹精なバイスホルンだった。

感激した女房はマッターを眺望しながら電話をしていた。
1 時間ほど展望所で眺望を楽しんだり写真を撮ったりしていた。

ゴルナーグラート展望台からの大パノラマ



バイスホルン



展望台に別れを告げ、一つ下のローデンボーデン駅からリッフェルベルグ駅までを1時間半ぐらいかけて、美味しい空気を存分に吸いハイキングを続けた。

植物園に劣らない花々がみごとに咲いていた、そして歩き始めて40分ぐらいのところで夢に終ると思っていた逆さマッターホルンが綺麗に映っているではないか。

夢の実現だ、感激だった。皆で写真を取り合った。
これで旅費は取り戻したというか、お金には代えられないという実感だった。
マッターホルンは散歩の最初から終わりまで角度を変えながらもつきあってくれた。
このハイキングコースをいつか、もう一度歩きたい、70才台も健康に過ごそう！

逆さマッターホルン・リッフェルベルグ



3日有効なフリー切符が配られていたので、もう一度展望台に登ってよし、高速地下ケーブルで別の展望台に行くのもよしだった。

とにかくあまりの感激で疲労感があった、一旦ホテルに帰ってゆっくりできる

時間だったので自前の「純日本食」をとることにした。

部屋で湯を沸かし、駅前 coop で買ったブドウやトマトそれに持ってきた日清食品どんべえ、そのあとで緑茶を飲み元気を取り戻した。

結局は「純日本食」で元気を取り戻し、昼寝のつもりが安心してしっかりと熟睡してしまった。

チケットは無駄になってしまったが、達成は 60%でよしの精神で明日のフランス側への移動にそなえることにした。

旅も第 8 日目、土曜日の朝だ。

朝 6 時、食事前にマッターのご機嫌を伺ったところ雲が頂上付近にかかっていた、昨日までの快晴はどうやら、変換点を迎えた感じだった。

朝 8 時、ここにきた時の逆にテーシュまで電車、そこからバスでシャモニーに向かった。久しぶりに村から街に入ってきた。

昼食はシャモニーで日本の食だった、ジャポニカ米は 8 日ぶりで大変有り難かった。

お腹も落ち着き、いよいよ最後のモンブランの展望となった。
個人的な目的はすでに果たしていたが、おまけとして、モンブランは白いか黄色いか、名前では白だが・・・。

50 人乗り以上の大型ゴンドラ 2 本の直列乗り継ぎでエギーユ・デ・ミデ展望台の一段目に到着した。

さらに、上の展望台にエレベータで上がる 3842m だ、高度恐怖症である小生にはちょっとキツイ気がした。

乗って 20 分もしないうちにシャモニーの街は豆粒に見えた、2 本目に乗り換えたら垂直にゴンドラが引上げられた。 目前には絶壁に金属棒を埋め込んだゴンドラ止めが目に飛び込んできた、昔々の映画「禿げたかの要塞」を髣髴とさせた。

いよいよだ、一段目の展望台から橋で二段目の展望台の基に渡り橋があり、一歩乗った時、突風に氷雪のかけらが吹き飛ばされて顔に当たり、ちくっと痛たかった。

そこから二段目展望台の避雷針が頭上に見えた、あんなところまで上がったら・・・と考えるだけで緊張してトイレにいきたくなった。

恐怖をしのいで登ったが、無情にもモンブランは雲にお隠れのままであった。

雲がなければ、モンブランの他、グランドジョラスなど 4000m の名峰達を眺望できた。

エギーユ・デ・ミデ展望台



ゴンドラからの写真



最後の宿泊先ホテルはジュネーブの真ん中にあった、街もホテルもドイツ語圏から抜け出しフランス国内のような雰囲気であった。

「夕食は日本食」の前宣伝に期待したが、シャモニーの日本料理店には遠く及ばなかった。

お風呂で8日間のスイスのほこりと汗を洗い流して、早々に眠りに落ちた。(完)



私の余生は老い仕度（その6）

2014. 5. 22 須藤 和雄

前回の拙文(その5)の文末で

~~~~~

ちょつと大風呂敷を広げ過ぎた嫌いが有りますが更に広げて次回以降で

【日本の心＝「和」の精神(日本人の伝統的価値観)】とか、

【日本における死生の行方「あの世」はどこある?】

【自然の中のスローな暮らしを考える】辺りの記述を試みたいと思います。

~~~~~

と書きましたがその後数か月、余りの大風呂敷を広げた事を悔いつゝ落ち着かない気持ちで過ごしておりました。

そうしている内に海外暮らしが長かった友人に素晴らしいメッセージを頂戴致しました。

『生かされていることに感謝し、束縛せず、されず、心豊かに過ごす。

日本人らしく～。』

日本から離れて暮らしていた人が『日本人らしく～』と述べた事に驚きました。

「何故、今さらこんな事を」と一瞬思いましたが「日本を外から眺めた方が上手に見える」のかも知れません。

ここで言う「日本人らしさ」とは何なのでしょう?

「日本人とは何処から来て、どう云う道を辿り、何処に行くのだろうか」

とか「世界の中の日本人は」とか「日本人の今昔比較」等色々な見方があると思います。

日本の心＝「和の精神」が日本人の伝統的価値観を作っていると云う事はよく聴いたり読んだりしますが、
私なりに調べた結果を箇条書きにすると以下の様になります。

~~~~~

### I. 異を受け入れる寛容さ

八百万の神国に仏教渡来、雅と侘び寂び、在来療法と西洋医学、  
和食文化～『異物融合力』と云えるかも知れません。



## Ⅱ. 程良い距離感

地域社会内でも、知人友人とでも、家族同志も～  
他に対する気配り重視とか『最後は独りと云う覚悟』とかの辺りでしょうか。

## Ⅲ. 秩序&公德を重視

これは「自由&個人(自己主張)」より尊重する日本の伝統であり、誇るべき価値観であると思います。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

先程述べた友人と一緒に暮らした海外の方々はⅠ～Ⅲの心情、行動が薄いのかも知れません。

そして海外で暮らした間は「望郷の念」が強く、今でもその事が頭に沁み付いていたので「日本人らしく～」となったのでしょう。

一言で表現するならば、日本精神は『調和の精神』と言っても過言ではないと思います。

### 【調和の例1】

最近ユネスコ無形文化遺産に登録された「和食」の考え方を見ても  
「日本を語る」になっています。

(農林水産省の資料によると和食が日本文化である理由とは・・・)

#### ●歴史が育んだ日本の味～食文化とは何か？

1. 自然の尊重…自然の美しさや四季の移ろいを表現
2. 社会性…年中行事のハレ日料理、家族や地域の絆を育む
3. 健康長寿への思い…一汁三菜、「うま味」による少脂料理
4. 風土が生んだ多様性…南北に長細い国土、海・山・里と表情豊かな食材と調理法

#### ●和食ガイドブックに記載されている「和食の特徴」とは？

【1 献立のかたち】「ご飯」を食べるために、「汁」と「菜」がある。  
「一汁三菜」が和食の基本型



- 【2 食材】和食を支える日本の食材 …おいしさの秘密と多様性
- 【3 調理】切る、煮る、焼く、蒸す、茹でる、和える、揚げる…  
あの手、この手で素材を、よりおいしく
- 【4 味わい】うま味。日本人が発見した「おいしく食べる」最大の知恵
- 【5 栄養】栄養バランスの優等生、「和食」
- 【6 しつらい】人をもてなすための「心と形」
- 【7 箸と椀】「和食」を支える、箸と椀
- 【8 酒】「和食」を引き立たせ、心をほぐす日本の酒
- 【9 和菓子・日本茶】暮らしに寄り添う和菓子とお茶

長年かかって色々な要素を「細部まで拘って」まとめ上げた見事な  
文化的調和だと思います。

### 【調和の例 2】

私は特に信仰心を自覚したことはありません。  
でも昨年より「西国三十三ヶ所巡礼の旅」を始めました。現在のところ17観音を参拝致しました。これからも続けます。  
近くの十八神社、大神神社、石上神社、宇陀水分神社等などに参拝して静かな時を持つことも好きです。

これは「八百万の神国に仏教渡来」という史実を知ってか、何ら違和感を感じません。

私の中では神仏が矛盾なく『調和』して存在しているのです。  
認識上の真と、倫理上の善と、審美上の美(人間の理想としての普遍妥当な価値)が神仏とも揃っているからだと思います。

### 【調和の例 3】

国際宇宙ステーションで日本人初の船長任務を終えて帰還した若田光一氏。  
世界に示した日本人リーダーの資質は「和の心、粘り、計画性」とのこと。  
ステーションの窓から外を見て「月飾る蒼い大気と宇宙の闇」と一句。  
正月に筆を使って「和の心」と書き初めしたとか、  
節分には散らばらないよう袋に入れたまま豆をまいたことなど  
和の心で色々工夫をして「人心の船内調和」図ったと報じられています。

### 《むすび》

未来だけを見つめて暮らして来た我々。気が付くと「今」にこそ素晴らしいことが一杯あることに気が付きます。  
それは「我々は日本人として下り坂を楽しみながら暮らしている」と云う自覚があるからだと思います。

皆さんから叱咤、反論、お導きをご教示頂きたいと思いつゝ筆を置きます。

(ちょっと一言)

かなり昔の昭和ことばに「しらじらしい」があり、よく耳にしました。  
この拙文が「しらじらしい」と思われたら「よくぬけぬけと」、「面の皮が厚い」、  
、「今話題のコピペの羅列」等のお小言があるかも知れません。  
本誌の編集後記には何時も『読後の感想や批評・ご意見も寄せてください』と書いてありますが未だにお小言をお聞きしておりません。  
これは書きながら思った小さな心配事です。

(つづく)

## 琵琶湖一周ウォーク Part 4 句集

2014. 4. 9

彼所（あそこ）見てここもいいよと花行脚  
はち切れてこぼれむばかり桜咲く  
花見客野点の客となりにけり  
近江湖やびくの小鮎の騒がしき  
春の湖ジャズを流して出航す  
糸柳寄せ来る波も躲（かわ）しけり  
石山にたわわな胸や山笑ふ

甲斐田裕昭

叡山を背に琵琶湖の花吹雪  
霞ても高層ホテルはくっきりと  
桜咲く近江の宮の巫女さやか  
春霞去りて懐かし近江富士  
花筏揺れ揺れ光るビオトープ

須藤 凡雑

散る花を取りっこしている子供たち  
クルーズ船花の琵琶湖を一巡り  
咲き誇る花の下にて独り酒  
花盛り園児は渚に戯れて

高見 凡高

朝靄の瀬田に二杯の蜷船  
女房が匂いで起こす蜷汁  
さざ波の湖にマガモと花筏  
琵琶湖へは幼子連れて子鮎釣り  
廃寺の礎石のくぼみ花筏

原 政雄

かの歌のボート部今も琵琶湖岸  
ひもすがら花と琵琶湖の三万歩  
瀬田川の彼方こなたの花盛り  
群れなして琵琶湖愛しと残る鴨  
散る花もこれより京へ疎水口  
落椿石山寺へいざなひて  
花散るや石山寺の参道に  
日米の国旗掲げて遊覧船

金城 凡生



日時計に春日燦々大津京  
翁像（おきなぞう）拝して春の近江路へ  
ストローでちまちまやるも花見酒  
首伸ばしあち見こち見の河鵜かな  
のどけしや湖にあちこち船だまり  
入学児電車通いに身を縮め  
廃寺にも花ぼんぼりの近江かな  
若柳瀬田の唐橋とこしなへ  
白木蓮お宮に巫女の赤袴  
琵琶湖向き新入社員のところざし  
唐崎の浜を寄らずに春惜しむ  
鵜の海（におのうみ）霞めば近江富士も又  
夕暮の比叡山裾花明り  
おだやかな琵琶湖の一景鰯（えり）を挿す  
大津絵も歩道を飾り花街道  
春光にきらりぶつ込み釣りの竿

金城 凡生



芭蕉さんと並んで  
行く春を近江の人と惜しみける 芭蕉

## 親の姿・子の心

2014.5.15 三明博夫

前薬師寺管長の高田好胤師（平成15年5月72歳でご逝去）のお話を取り上げました。私は特に宗教に関心は持っていませんが、このお話の中で感銘を受け、交通安全につながることをして、受け止めた言葉がありますので、ご披露させていただきます。

子育ての一つとして『いただきます。ごちそうさまでした』と言える子に育てなさい。と言う話がありました。これが言える子供は当然朝起きたら「おはようございます」出かける時は「行ってきます」と言えるわけです。ここが大切なのです。交通安全に一番大切な「思いやり」と「感謝の気持」が出来ているのです。

又、「かたちが大事」ということとお話がありましたが、そのとおりだと思います。最近では形にとらわれない、あるいは型破りが大物になるとか素質を伸ばすとか言われていますが、やはり＜形が心を表す＞ということで形は大事です。反対にそうした心があれば自然に＜形になって表れる＞ということも言えます。電車の運転士さんがやっておられる、＜指差し呼称＞もこれだと思います。

これと同じようなことを教育の網次昌永先生（荒廃する中学教育の再建に生涯をかけ生きた実践教育者として数々の中学を蘇らせた先生）も「教育のすすめ」の中で次のように語っています。

一つ：必ず親にあいさつする子にすること。

二つ：親に呼ばれたら必ず「はい」とはっきり返事のできるようにすること。

三つ：履物を脱いだら必ずそろえ、席をたったら必ず椅子を入れる子にすること。

つまり、あいさつと返事・けじめ・動から静へ。これが大事なことを教えています。

(完)



# 御在所岳登山記

2014. 5. 20 木山 裕昭

5月15日午前6時に4人の精鋭メンバーが榛原駅に集合しました。昨夜から降っていた雨もあがり、なんとか登山できそうな天気一同ほっとしました。近鉄電車を使い約2時間、車中では須藤さんのスマホで御在所岳の最新の天気をチェックしながら、湯の山温泉駅に8時過ぎに到着しました。



(中道登山口)

ここからはタクシーに乗り、温泉街を通り抜け中道登山口まで向かいました。タクシーを下車して、ストックや靴ひもを確認したり等の登山準備を終えて、登山届を書き、ポストインして、9時過ぎに登山開始です。



(おぼれ岩)

眩いばかりの新緑の中、気持ちが高ぶります。登山口からは、風化花崗岩がU字型に削れた急坂を登っていきます。20分ぐらい登ったところで小休止、ここからは、御在所ロープウェイの白い鉄塔と緑の山が見事なコントラストを見せています。この絶景に、一同しばし見入ってしまいました。さらに急坂を登っていきます。ここで美浪さんにアクシデント発生、靴底がはがれました。手持ちの紐がなく、スーパーのレジ袋を紐代わりに応急処置をして、登山を続けることになりました。そうこうしているうちに、巨石が斜めに重なった「おぼれ岩」が現れてきました。大きな岩が、崩れずに立っているのが不思議です。ここからは岩尾根帯になり、まるで北アルプスに登っているような気持ちになりました。そして、今回のお目当ての1つであるシロヤシオが、清楚な白い花を咲かせていました。そして、四角い岩が微妙なバランスで立っている「地藏岩」に到着です。立っている



(地藏岩)

岩は指で押すと、いまにも崩れそうです。この自然のおりなす風景は本当に不



思議です。振り返れば、眼下には雄大な伊勢平野が広がっていました。さー、  
気を引き締めて、慎重に足を運び、難関のキレットを通過しました。



(伊勢平野を望む)

ここからは、鎖のついた岩場が続きます。雨雲が通過しており、霧がかかってきました。その霧の中に、アカヤシオが淡いピンクの花をさかせ、浮かび上がって見えます。幻想的な風景を目にして、感激です。シロヤシオ・アカヤシオと御在所岳を代表する花を見ることができ、今日、仲間と一緒に登山に来て良かったなとつくづく思いました。



(御在所岳)

ほどなくして、富士見岩の展望台に到着。晴れていれば、富士山が見えるそうですが、今日はあいにく霧が出て視界がきかず、残念でした。そして、12 時過ぎに、ロープウェイ山上公園駅近くの朝陽台に到着。ここで、高見さんにお湯を沸かしてもらい、いつもの定番、カップ麺とおにぎりの昼食をとりました。一休みして、山頂に向かいましたが、霧雨が降ってきて、気温も下がり寒くなってきました。山上公園の芭蕉池に立ち寄り、可憐な水芭蕉を鑑賞してから、一等三角点のある御在所岳頂上を目指し、冬はスキー場となるゲレンデを登って行きました。登山を開始してから約 3 時間をかけて、鈴鹿の盟主御在所岳頂上に到達しました。やったという感



(一等三角点)

じです。晴れていれば、琵琶湖も見えるのですが、今日はいかんせん霧の中です。立派な一等三角点の前で、記念写真を撮り、ロープウェイ山上公園駅に向かいました。ここからは、ロープウェイで一気に下山です。登ってきた、中道コースの途中にあった、地蔵岩やおぼれ岩を窓越しに見ながら、ロープウェイ湯の山温泉駅に 14 時前に着きました。そして、ホテルウェルネス鈴鹿路の温泉で汗を流し、缶ビールで軽く反省会をしました。気にしていた天気もなんとか持ってくれて、シロヤシオ・アカヤシオに出会え、奇岩の地蔵岩・おぼれ岩の自然美も堪能し、そして仲間にも恵まれ楽しい 1 日を過ごすことができました。

## 御在所岳で出会った花

(シロヤシオ)



(アカヤシオ)



(タテヤマリンドウ)



(ミズバショウ)

## 御在所岳登山を終えて

あな嬉し鈴鹿の盟主登り切り 裕昭

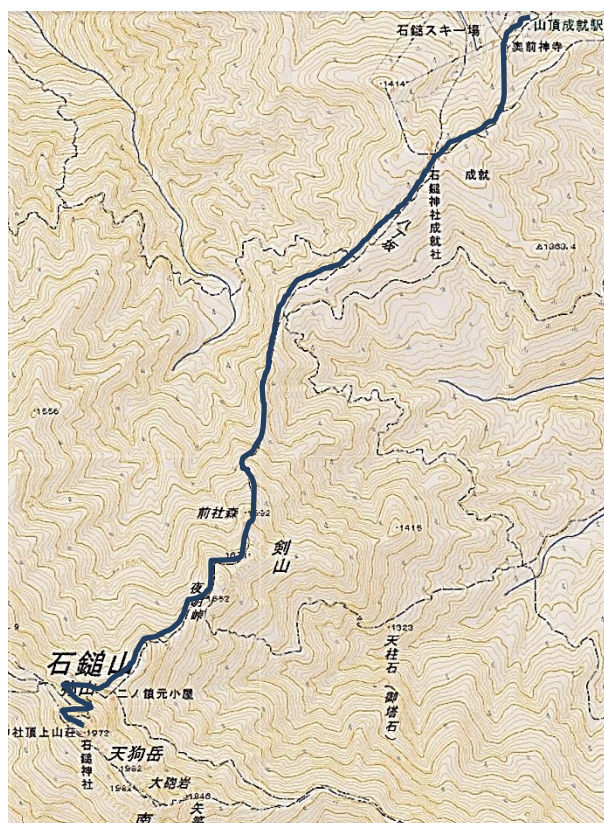
<参加者> 須藤和雄、高見毅、美浪敏明、木山裕昭 以上4名



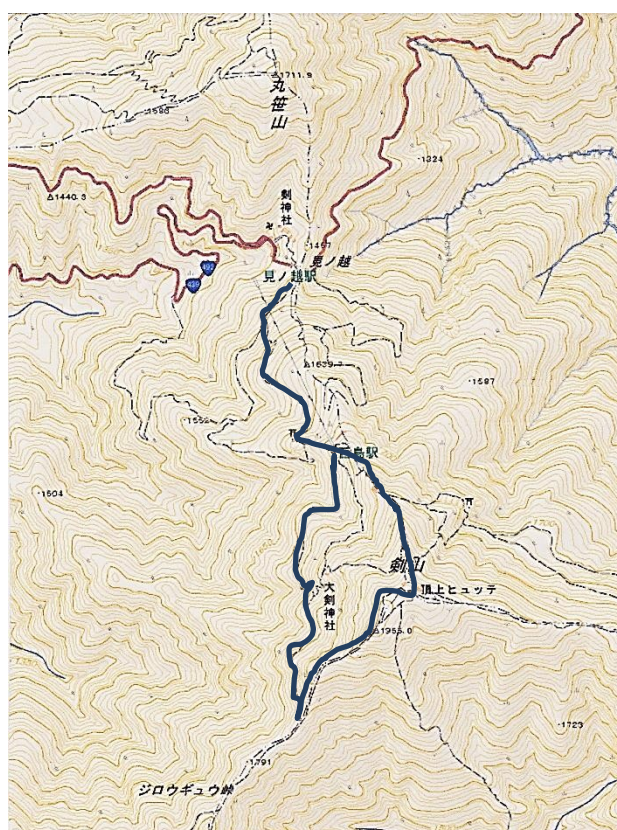
## 四国の名山“石鎚山と剣山”に登る

2014. 5. 31 高見 毅

私達の八剣山の会も4年を経て徐々に活動の巾を広げ、昨年の開聞岳に続き、今年は四国、東北への遠征が企画された。本山行は四国の中で役行者が開山したと言われ山骨稜々で厳父的“石鎚山”と弘法大師が聖地を高野山にするか、この山にするか悩んだと言われる豊かな膨らみを有する慈母的な“剣山”を計画した。



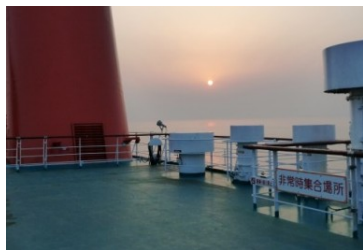
石鎚山 1982m



剣山 1955m

- ◆ 5月28日(水)
  - ・ 榛原 19:00 ~ 大阪南港 フェリーターミナル (四国オレンジフェリー) 出航 22:00
- ◆ 5月29日(木)
  - ・ 東予港着 6:00 ~ 新居浜 (レンタカー) ~ ロープウェイ 9:20 ~
  - ・ 登山開始 9:35 ~ 八丁平、試しの鎖、夜明峠、二の鎖 ~ 頂上着 13:30
  - ・ 下山開始 14:00 ~ 同じルートにて (17:00 ロープウェイ) ~ 宿着 19:30
- ◆ 5月30日(金)
  - ・ 宿出発 8:00 ~ (車) 見ノ越 9:15 ~ 尾根ルート ~ 頂上 11:30 (昼食)
  - ・ 下山開始 12:00 ~ 次郎笈側鞍部 ~ 御塔石 ~ 西島 ~ 下山 13:30
  - ・ ~ 徳島駅 (レンタカー返却) 16:45 ~ 高速バス ~ JR難波 ~ 榛原 20:30





フェリーでの御来光



成就社で成就を祈念



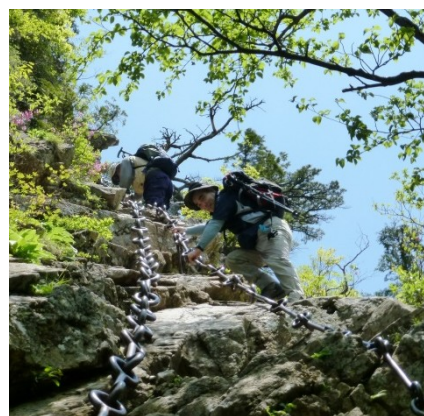
鎖場が面白そう



これからが山域だ



ブナなどの新緑の中を黙々登る



試しの鎖場：船津、原、須藤の順で果敢に挑戦。三明、高見は急がば回れで回避する。



夜明峠



ついに登頂！何故かお疲れ気味





つるぎの宿岩戸（アメゴ鍋も）



さあ登山開始



頂上が見えて来たよ



広々とした頂上

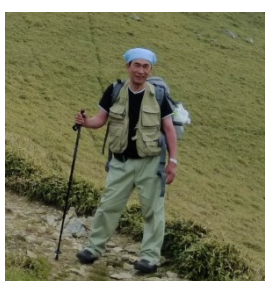


剣山頂上



下山開始

## 《 参加者 》



## 《山旅を終えて》

好天と新緑の中、とんと昔から地域の人々に崇められた四国の名山を皆さんと共に登頂できたこと、また、知らない土地（一字地区）に泊まり歴史と郷愁を感じたことなど、多くの楽しい思い出ができました。 ありがとうございました。 （おわり）

## 最近の注目すべき登山情報 2

2014. 5. 25 情報まとめ：須藤和雄

この「最近の注目すべき登山情報」は春季号からスタート、今回は2回目です。

### ■HUFFPOST(政治)ニュースより

「山の日」法案成立へ 8月11日、新たな祝日に。  
参院内閣委員会は22日、平成28年から8月11日を「山の日」と定める祝日法改正案を自民、民主両党など与野党の賛成多数で可決した。  
改正案では「山の日」の意義について「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」と明記した。

本法律施行は2年後の8月11日からですが今年と来年の8月11日にこの改定の意義を早目に「八剣山の会」の行事計画に反映させて見るのも一興です。

関連情報/コメント等は[5月22日のHUFFPOST\(政治\)ニュース](#)を参照して下さい。

### ■奈良県立図書情報館の所蔵資料検索より

2011. 6 著者：田代博著(出版社：祥伝社)

『「富士見」の謎 ― 一番遠くから富士山が見えるのはどこか?』より

「富士山が見える日本一遠い地点はどこか?」皆さんはこの問いに答えることができますか?

本書はこの問いを徹底的に追い求めた一冊です。 本書によると、富士山を眺めることができるポイントは全国20都府県に存在します。

実は、奈良県にも富士山のビューポイントがありました。 三重県との境の高見山地・台高山脈、そして大峰山脈にダイヤモンド富士の見える地点があるそうです。

ダイヤモンド富士とは、富士山の頂きに太陽が重なる現象です。

まるでダイヤモンドのように輝くことからこの名前がつけられました。

大台ヶ原山や高見山、大峰山脈では、過去にダイヤモンド富士が撮影されています。また、奈良盆地の東、室生火山群に属する額井岳からも297km先に富士山の頭を覗くことができます。

奈良の額井岳から富士山を遠望できることを知ると、富士山がより身近に思えてきます。





【詳細データ】 [奈良県額井岳からのダイヤモンド富士](#)

又、2013 年 5 月 24 日《関西テレビ》 スーパーニュース アンカー 金曜日のギモン！？でも放送されました。

[大和富士（額井岳）からダイヤモンド富士撮影に成功！](#)

我々の肉眼では見えないとの事ですが何かロマンを感じる“事実”の様です。

■[春季号記事「弘法大師の道 今年 5 月、正式開通予定」の続報。](#)



◎弘法大師の道 トレイルランニング

□ 6 / 28 (土)・29 (日) 1泊2日

吉野山～高野山 (55.7 km)、天川村洞川～高野山 (42.4 km)

でそれぞれレース。参加費等くわしくは下記より。

□ 問合せ＝実行委員会 (県南部東部振興課) 0742-27-1515

[Kobo Trail 2014](#) (ルート図も確認出来ます)

◎山岳グランフォンド i n 吉野

□ 10 / 5 (日) 予定

吉野山を起終点に奈良県南部～東部を巡る自転車レース。

□ 問合せ＝奈良県サイクリング協会 0742-23-3249

[山岳グランフォンド i n 吉野](#)



上に紹介した2つはかなりハードルの高いものだけですが、温泉やパワースポットを楽しむといったユル～イものまで、イベントの種類は多種多様との事。この夏、「紀伊山地の霊場と参詣道」から目が離せないと思います。

★参詣ハイキング道路の整備も進んでいるとの事です。間もなく我々の行事に組み込むことが出来るかも知れません。

■春季号記事「天女花（オオヤマレンゲ）に会えるだろうか？」の続報。

5月20日宇陀市観光協会 Facebook タイムライン情報

つつじの見頃を終えた鳥見山公園では、大峯山系で天女の花と呼ばれているオオヤマレンゲが咲き始めています。白く清楚な花です。



《お願い》

この「最近の注目すべき登山情報」は高見さんの発案で始まった連載記事です。「八剣山の会」に相応しい切り口、情報の共有方法だと思います。素晴らしい登山情報をお持ちの方、新しい登山情報を発見した方はどんどん記事にして寄稿して下さい。

以上

---

編集後記：周りの山々は新緑から青葉へ。＜鳴いて血を吐くホトトギス＞も朝な夕なにあの雄叫びが聞こえるようになった。額井の棚田は大和富士を映し若苗もすくすく育っている。年金畑では熱心な野良人があちこちで汗を掻いている。いよいよ本格的な夏の訪れは私達山の会の出番です。それぞれの体力と相談しながらも、「登魂」で山歩きを楽しみたいものです。＜登魂と掲げ迎える山の小舎 凡生＞＜山恋へばいつも青春雲の峰 凡生＞＜雲海の底にわが町横たはる 凡生＞▲「春秋」誌2年目の夏季号をお届けします。お陰様で寄稿も順調に編集員一同喜んでおります。▲今号のトップ記事は木山さんの「六甲山縦走記」を取り上げました。この登山の記事は他のメンバーと組んでの奮戦記です。当会では木山さんに遅れて3月28日に「六甲全山縦走パートⅠ」を実施しました。同じ六甲山縦走でも、当方は今年を手始めに数年も掛るのですが木山さんは、一泊二日で完走したわけです。その健脚は素晴らしく＜山恋へばいつも青春雲の峰 凡生＞この句は木山さんに相応しい句とも言えるのではないのでしょうか。来年以降に実施する当会の「六甲山縦走」の参考にしたいと思います▲今回も小西さんから寄稿がありました。昨年「雨」「土」「風」「路傍の石」に続いて今回は「野草歳時記」です。野草などの知識に疎い小生には一読しただけでは、そのアカデミックな文章に戸惑いもありましたが、これまでの小西さんの作品に一貫しているのは自然への慈しみと自然賛歌です。その姿勢にはおおいに共感できます。次は何を語るか今後の楽しみでもあります。▲三明さんの「親の姿・子の姿」含蓄のある話有難うございました。薬師寺の高田好胤師はその法話の中で、仏教には「無財の七施」（むざいのななせ）の法話があるとして、「和顔施」（わがんせ）笑顔でにっこり笑うこと。「眼施」（がんせ）じっと相手を見つめ言葉にならない声を受けとめようとする事。それから「言施」（ごんせ）は、言葉を尽くして相手の慰め「大丈夫だよ」と言って安心させること。日常的な言葉でも老人に席を譲る「牀挫施」（しょうざぜ）や自分の体を使って人に奉仕する「身施」（しんせ）、他人を思いやる「心施」（しんせ）。寝場所をあたえる「房舎施」（ぼうしゃせ）説いています。無財、すなわち金がない人でも、だれかのためにできることはたくさんあると語っているのです。「言うは易く行はるは難し」ですが心したいものです。▲次の秋季号は原稿8月末締切9月20日発行です。寄稿もよろしく願います。それからいつもお願いです。読後の感想や批評・ご意見もお寄せください。なお、秋季号の前に「写真特集」を発刊することにしました。寄稿依頼のご案内は6月末に発信いたします。7月31日締切、8月20日発行の予定です。そちらの方もご協力ください。

凡生

---